

「美しきかな我が兵器の有り様」 The Beauty of Our Weapons by Andy Lane

「問題発生です。」イアントがハブへ小走りに入りながらいった。

「もう少し具体的にいってほしいな。」オーエンは医療用コンピュータから目を上げもせず、つぶやいた。「コーヒー関連の緊急事態か？抽出温度が正確に上がらないとか？ジャマイカン・ブルー・マウンテンのコーヒー豆が切れたとか？それとも、観光客がろくに来なくておまえが座ってただ待ってるだけの超こじんまりした部屋の関係か？どうせ、壁紙が剥がれてきたとかだろう？」

オーエンの嫌味を無視し、イアントはハブを横切ってジャックのオフィスの戸口の方に向かった。彼は黄色の紙を振り回していた。「アーカイヴから物が消えています！」

「どうしてそんなことわかるの？」トシコがワークステーションのそばで、まともに機能する装置というよりも宝石を散りばめたクモの巣にしか見えないエイリアンのサーキット・ボードをはんだ付けしながらいった。

キャプテン・ジャック・ハークネスが机の向こうの薄暗がりから現れ、部屋を横切り戸口に向かって歩いてきた。イアントは戸口に立ったまま、自分のパーソナルスペースにジャックが入り込むのをしばし許してから脇に寄った。

「彼はいま、倉庫に実際格納されている物と記録の付き合い合わせ作業をしている。」ジャックは答えた。「数年に一度行う監査の一環だ。」彼はイアントの目を見据えた。「本当に行方不明なのか？記録を誤っている可能性や置き場所を誤っているという可能性は？」

イアントは首を振った。「どこかに紛れるには大きすぎます。くまなく探しました。痕跡すらありません。」

「**大きすぎる**って？記録にはなんと記載されている？」ジャックはたずねた。

イアントは手に持った紙を調べた。「記述によれば、エイリアンの人工物で、球体、直径およそ2メートルで、1938年にイストラッド・ミナフ近くで裂け目から漂い出たところを発見されました。たぶん、芸術作品・・・彫刻の類だろうとのこと。」彼は紙に向かってしかめっ面した。「この字はあなたのものでしょう、ボス。」

ジャックは紙を取ると、じっと見た。「ありうるな。」彼はいった。「でも書いた覚えは無い。前にもいったが、多くの結婚証明書と宣戦布告書も同じセリフをいわれる筆頭だ。」彼は顔をしかめた。「で、芸術作品だって？そんなものがそれほど多く流れ着くとは思えないが。武器はしょっちゅう。牙を持ったけんか腰の生き物はいわずもがなだが。芸術作品だって？」

座っていた階上の会議室からグエンが降りてきて、記録に目を通した。「2メートルもある彫刻をあなたが倉庫に入れたなら、忘れるはずないでしょ。」彼女はいった。

ジャックは肩をすくめた。「そいつがおれを殺そうとしたとか、おれとセックスしようとしたのでない限り、忘れることにしている。」彼はしばし考え込んだ。「探さねばならんな。」

「なぜ？」オーエンはディスプレイから目を上げ、質問した。「危険でもないのに。もし

かしたら、エイリアン的にはテーブルについてポーカーする犬のくだらない絵程度かもしれない。おれたちはもっと心配すべきことをたくさんかかえてる。」

「物の問題ではない。」彼の声がハブに響き渡った。これはチームの誰もまねできない技だった。「アーカイヴの物件が消えるような事態を一度許したら、今度はいつそれを止める？南大西洋地域の積荷信仰を知らないのか？飛行機が島の上に飛来してくるまで、彼らは完全に孤立した暮らしをする原始的な部族だった。彼らは靈魂が彼らの文明を破壊するものを持ち込んでくるという飛行機を巡る一大宗教を作り上げた。」彼は顔をしかめ、一瞬間を置いた。「おれにはまったく理解不能な理由で、彼らは信仰対象をエディンバラ公に切り替えた。とにかく、われわれには地球の文化が汚染されないよう守ってやる義務がある。」

「地球は地球人だけのものってこと？」グエンは階段のほうから挑戦的にいった。「それは少しばかり人種差別主義だと思わないんですか？」

「種族差別主義・・・かな、専門的には。」トシが割り込んだ。

「対処できるなら、エイリアンの美術品を持てばいい。」ジャックは冷静に答えた。「そうしてる間に、君とトシは彫刻がどこにいったか探してくれ。イアント。君とおれで、どうやって2メートルもある球体をわれわれに気づかれず持ち出し可能だったのか理論の究明を行う。」

「おれは？」オーエンが気分を損ねたようにたずねた。

「イアントの付き合い合わせ作業を引き継いでくれ。他にも消えたものがないかどうか知りたい。ついでにポットにコーヒー入れておいてくれるか。必要になるだろうから。」

「最初に何から始めるって、」ジャックからの指示のあと、トシとグエンでトシのワークステーション前に座ると、トシがグエンに話しかけた。「やっぱネット検索ね。わたし、インターネット以外も探せる検索エンジンを開発したの。無線やブルートゥースにも接続して、個人のデータベース、企業内部のサーバ、政府のコンピュータもハッキングして情報集積、検索できるのよ。」

「やばいことしてる。」グエンはいった。「あたしたちがこのような技術を悪用しないと信じてもらえるっていいことね。」

「実をいうと、」トシは真っ赤になりながら、認めた。「一度だけオーエンが付き合い合ってる女の子を調べるのに使った。彼女は金品目当てだった・・・彼に宝石やブランド物の服をねだってた。彼女はいい子じゃないということを彼に証明したかった。」

「で、どうなったの？」

「わたしが話す前に、彼はどうやってか彼女を説得してサンタルチアに行くファーストクラスのチケットを買わせてしまい、向こうで数日過ごしたあと彼女を見限って、スチュワーデスに鞍替えしちゃった。」彼女は首を振った。「救い難い性格よね。」

「他にいいようがない。」グエンはそっけなくいった。

トシのディスプレイに、ページの上にトーチウッドのロゴが浮遊している以外普通の検索エンジンと変わらないページが表示された。トシは、行方不明の彫刻に関する記述を入力し、リターンを叩いた。数秒間は何も反応しなかったが、スクリーンが光って数件だけ結果が表示された。

「大半は予想通りってとこね。」トシは結果をスクロールしながらいった。「発見されて、トーチウッドのアーカイヴに収蔵される前に、芸術家がだれかを突き止めようとしたり、彫刻が作られた時期を推測しようとしたりしたって情報ね。でも、ひとつ、ふたつは・・・これ見て！新聞のコラムに、金持ちのウェールズ人慈善家アシュリー・アブ・ヒューの個人収集、非具象主義芸術に関する情熱だって。彼の収集の呼び物は、内側から輝く大きな球体で、表面を模様が当ても無く漂っている。」

「間違いなく調査のターゲット。」グエンはいった。「コラムにそれがどうなったか書かれてる？」

トシは首を振った。「言及されているのはそれだけ。その後は情報なし。ついてない。」

「簡単に諦めないで。」グエンは答えた。「技術が付いていけないときは、いつだって伝統ある調査方法に戻るの。行って、あたしたちの目で確かめましょ。」

トーチウッド・アーカイヴの影と闇の中、煉瓦の天井からポタポタポタと滴り落ちる水滴の音と、キャプテン・ジャックが手に持っているスキャナーがピッピッピッと鳴る音を聴きながら、イアントは立っていた。

「周囲に名残があるな。」ジャックはいった。「彫刻の正体がなんであれ、放射能を発していたようだ。」

「有害なんですか？」イアントは何気ない振りをしてたずねた。「将来ぼくが子供を持つチャンスが阻害されるとか？」

ジャックは彼をざっと見渡した。「そっちの話なら、放射能の心配をしなくていいと思うぞ。」彼はいった。「本当にほんの少しだけ自然状態よりも放射能値が高いにも関わらずな。トシ無しでおれができる範囲の外挿法で過去の状態を推定する限り、発見されたときはたぶん少し生暖かくてピリピリ痛む程度よりは、たぶんほんのわずかひどかったろうけどな。」

「ピリピリ痛む？」

「科学用語的にいえばな。たぶん芸術効果の一部だろう。」

イアントはまゆを上げた。

ジャックは周囲を見渡した。「放射能を計測しても、いま彫刻がどこにあるかはわからないが、ここから持ち出された経路はわかるかもしれん。」

1930年代の巨大な家は、白の漆喰に赤れんがだった。道路から後退させて建てられており、私道と金属の柵とセキュリティカメラで裕福なカーディフ郊外地区からは隔離されていた。道路脇の看板には、アシュリー・アブ・ヒュー美術館、入場料£3.50、開館：火曜日～木曜日 10時～16時とあった。

「現金持ってる？」正面玄関から入る時、グエンはトシコにたずねた。

「別料金が必要です。」正面玄関の受付の男がぜいぜい声でいった。彼のまばらな髪は白くかすかで、スーツは昔の栄光を思わせるものだった。おしゃれというには大きすぎる襟に留められた名札には「ビル・ウイリアムズ」とあった。

「なぜそのことは看板に書いてないの？」

ウイリアムズは顔をしかめた。「別料金だというと、みなさん払って下さらないからです。」

「どうしてわたしたちにはいうの？」トシはたずねた。

「もしそれでも入りますかとたずねなければ、この数か月は客がひとりも入らないことになりますから。われわれは時代の流れからはずれているのです。ご存じのようにガイドブックにも出ていない。『ウェブサイト』もない。」彼はその言葉を忌み嫌うように口にした。

グエンは周囲を見回した。ホールは白に塗られ、明るく照らされ、壁には絵画が所狭しと掲げられ、小ぶりの彫刻が台座に並べられていた。絵は色の染みみたいで何を描いているのかさっぱりわからず、彫刻は半分溶けかかっているのかこれから付け足そうとしているのかといった風に見えた。

「ツアーをご所望ですか？」ウイリアムズはたずねた。

「実のところ、」グエンは返事した。「わたしたち、ある作品を探してます。大きな球体で、人の背丈ほどの大きさで、中から輝いて見える。表面で模様が動くの。見たことありますか？」

「ああ、」ウイリアムズは悲しそうに首を振った。「『呪われた彫刻』ですね。もしお知りになりたいなら、3.50ポンド下されば・・・」

「呪われたですって？」トシコはかまをかけるように少しいらだち気味にいった。

「ミスター・アブ・ヒューは、生涯を通じて数多くの非具象主義芸術作品を収集してられました。その作品がミスター・アブ・ヒューの購入された最後のものになりました。珍品や独特な作品専門のオークションで見つけられたのです。何かひかれるものがあったのでしょ。彼は作品の前に座り、動かず、食事もなさらず、何時間も眺めておられました。最後に氏が発見されたのは、その作品の前でした。正面に座ったまま。完全に気が狂っておられました。」

「それはいつのことですか？」トシはささやいた。

「1963年8月13日です。」

グエンは自分の感情を押さえこんだ。「どうして狂っているとわかったのですか？」

「氏が自らの顔の皮を線状にはいで、彫刻の表面に張り付けていたからです。」

「わかりました。納得しました。その後、どうなされたのですか？」

「彫刻の表面の色のことを叫びながら、三週間後に敗血症で亡くなりました。強烈な鮮明な色だと。」

「で、彫刻は？」 グエンはいやな予感がしてきたが、たずねざるを得なかった。「彫刻はどうなったのですか？このどこかに展示されているのですか、それとも、後世のために倉庫に仕舞っておられるのですか？」

ウイリアムズは悲しそうに首を振った。「ミスター・アブ・ヒューの遺言執行人は、作品に悪評がつくことを恐れました。だから売られてしまいました。」

「だれに？」

「名も知らぬバイヤーにです。」

「わかります。」 グエンは首を振った。「簡単にいくはずないと思った。そのバイヤーがだれか、ほんの少しでも手がかりはありませんか？」

ウイリアムズはしばらく考え込んでいた。「前にもその彫刻を探しに来た人がいました。1970年代のことです。私立探偵でした。彼は入場料の領収書を書いてくれといったので、わたしは彼の名前を覚えていました。だから、さらに三日後、彼の遺体が見つかったという新聞記事に気づいたのです。遺体は港のドック地区で見つかりました。銃殺でした。警察は捜査しましたが、犯人は見つかりませんでした。警察はギャングと麻薬の関係だろうと終わらせてしまったのだらうと想像しています。わたしが知っているのはそこまでです。すみません。」

グエンは出ていこうとしたが、トンは立ち去らず、ウイリアムズに向かって「あなたはその彫刻を見たことがあるの？」とたずねた。

「一度だけ、」彼は認めた。彼は左手を挙げ、手をじっと見つめた。手の甲の皮膚はしわがよっていたが、古い傷跡が紫色になって残っており、それはさながら、何年も前に爪で身をえぐり取ろうとしたような跡だった。「たった一度だけ。しかし、いまでもその光とその中で動く模様が忘れられません。いまでも覚えています。」

ジャックとイアントは放射能の痕跡を追い、ハブの中を、さらに脇から外に伸びている、どこに向かっていいのか誰も知らない巨大なアーチトンネルのひとつに入った。

「これらの地図を作っておくべきでしたよ。」 イアントは暗闇を見つめ、文句をいった。

「一度、このうちのひとつに沿って歩いてみたことがある。」 ジャックはいった。「四日間。ただひたすらまっすぐ、一度も曲がらず、北東方向のどこかに向かっていた。グラスゴーに向かっているという結論に達したが、最後まで行くには手持ちのサンドイッチが足りなくなった。見つけ出すことがとても重要だったなら、止めなくもなかったが、おれのような男らしい体格で、何週間も飢えで死んでは生き返るのを繰り返すなんてあまり恰好

がよくないだろうから。」

「オートバイを使えばよかったのに。」イアントは指摘した。「それだと速い。」

「なんだって？誰もおれを見てくれない場所で、皮ジャン着て、振動するエンジンに両足広げてまたがって格好いいポーズするのか？もし、おれがオートバイに乗るなら、公道で乗る。あいにくだな。」彼はため息をつくと、首を振った。「いつかおれに質問するだろうから先に答えておくと、彫刻は1950年代にトーチウッド・チームの誰かがこっそり盗みだして売った。そのころは内部に裏切り者がいて、カーディフの極秘オークションには、裂け目から流れてきたものを買うコレクターが集まった。」

「どうやってオークションを止めたのですか？」イアントはたずねた。

「おれが止めた。おれがオークションにものを流しこんだ・・・偽物を大量にね。いったん、もう本物のエイリアンのものを買えないと気づけば、市場は成り立たなくなる。」

ジャックの上着の中で、何か**ビーっ**といった。彼は小型通信機を取り出すと、耳に装着した。「トシだ。」数秒後、彼はいった。「何か見つけたらしい。」

トシとグエンが旧ドックの倉庫区画にたどりついたのは夕暮れ時だった。錆びたクレーンの骨格が上からのしかかり、海に沈む太陽が作り出す影がコンクリートの波止場と埠頭に長く伸びている。雑草と芝生がコンクリートの割れ目からこっそりはみ出て、見つからないように地面にびったりとへばりついている。

「例の遺体が見つかった場所はここ。」グエンはいった。「警察の記録にはスケッチの地図があった。ただ、このあたりは事件があったあと随分変わったから。」

「ここで何を探すの？」トシは神経質そうにあたりを見回しながらたずねた。「いたいのは、いまさらろくな証拠は残ってないってこと。随分前のことだから。」

「記録によれば、警察はこの区画を捜査し、倉庫のうち一か所だけは入れなかった。錠がかかっている、倉庫の持ち主を特定できず、強制捜査で押し入るだけの手がかりが得られなかった。だから、そこはそのまま置いておかれた。」

「それで？」

「警察が知らなくて、わたしたちが知っていることといえば、私立探偵がどこかに収納されているでかい何かを探していたってこと。倉庫はおあつらえ向きでしょ。たぶん、未来に価値が上がると信じて、コレクターがあれを買ったはず。」彼女は金属の波状壁のビルのひとつを指さしていった。「これがその倉庫。」

倉庫はいまも内側から錠が下ろされていた。二人は十分間かけて、エイリアン技術の電磁ビームジェネレータを注意深く適用し、ドアの向こうの差し錠をスライドさせ、錆びた蝶つがいを動かして扉を押し開けた。

中の空気は古く乾いた埃っぽい匂いがした。まさに沈もうとする赤く染まった太陽の光がほぼ地面と平行に金属の壁の穴から差し込み、数百のスポットライトが当たっているか

のように非常に広い内部を彩っていた。

「なんてこと、」グエンはあたりを見渡しながらかつぷやいた。「警察が捜査に入っていたなら、膨大な記録ができあがっていたでしょうに。」

倉庫の中心に置かれていたのは、大黒柱も屋根も含めた巨大な本物の寺院だった。人の姿が織り込まれたタペストリーは血に染まり、寺院の内部を隠していた。しかし、タペストリーがかかっていない寺院の土台の周りや階段部分には、さほど血まみれではないミイラ化した多くの遺体が散らばっていた。

グエンとトシコは少し近寄ってみた。遺体は無秩序に無様に手足を伸ばし、灰色がかった紙のような皮膚が骸骨を覆っており、ぽっかり空いた眼窩や大きく開いた口にはクモが巣を張っていた。金糸に縁取られた何か秘教のシンボルの入ったローブをみんな羽織っていたが、夏の暑さと冬の寒さに長年さらされた模様は色が抜けて褪めていた。

「わたしたち、芸術品を探しに來ただけなのに。」吐き気を催しそうな光景に苦しそうなしかめ面をしながら、グエンは文句をいった。「自分の顔の皮を剥ぐ狂人でもない。同時に全員が死ぬような風変わりなカルト宗教でもない。ただの芸術品を探してる。あたし、何か過大な要求でもした？」

「ほんとにカルトだと思う？」トシコが小さな声で聞いた。

「見てよ。秘密の寺院。ローブ。みんな毒を飲んで苦しんで死んだような格好。あなたに向かって『ジョーンズタウン』とか『ジム・ジョーンズ牧師様』とか叫ぶのよ。」

「そうかな？」トシコは乾燥したボディのひとつのそばにひざまずいて、頭蓋骨やローブにスキャナーを走らせた。「この結果をハブに送る。ジャックとオーエンが結果を分析してくれるから。」

「とりあえず、」グエンはいった。「あたし、このタペストリーの後ろの寺院に何かがあるのか興味がある。心の中では、アシュレー・アブ・ヒューの遺言執行人から買ったあの彫刻があってほしいと思う一方で、頭の中では、中は空で何もないって思ってる。」彼女は寺院の階段を昇り、タペストリーを脇に寄せた。「で、ここまでの結果、頭1点、心0点。心の負け。」

「彫刻は無かった？」

「もとは何かがあって、取り除いたみたいに、若干周りより埃が少ない。何かを引きずったような跡と、何か重いものを向こう側に引きずって歩いたような足跡がある。」

トシコはさらにボディのスキャンを行い、グエンは寺院の薄暗い内部を調査した。香の残り香が鼻についた。

彼女が表に出てくると、トシコはひとりごとをいっていた。むしろ、ハブの誰かにかも。

「オーエンが、アルカロイド系の毒をボディの唇と指に検出したといってる。」彼女はいった。「それから、ジャックがいうには、ローブの模様は、1970年代にカーディフで広まった小さな狂信カルト宗教のもので、エイリアンの技術を信仰していたそうよ。ジャックが『積荷信仰を思え』って。」

「彫刻がどこにいったのか痕跡が見当たらない。」グエンはがっかりしていった。「もし、初めはここにあったとしても。カルト信者が、なぜかしらエイリアンの彫刻であることを見つけて購入し、大がかりに信仰するため街に持ち出したのかも。で、その後何が起こった？それを見て、アシュレー・アブ・ヒューと同じように気が狂ってしまった？それとも、彼らが留守の間に盗まれて、それを恥じて全員自殺した？」

「私立探偵はどうなる？」トシコはたずねた。「彼は銃で撃たれた。毒殺じゃない。」

「たぶん、寺院から逃げ出そうとしたんでしょう。」グエンは推測した。

トシは周りを見渡した。「銃は見当たらないけど。それにエイリアンの技術を崇拜するカルトなら、何かエイリアンの武器を侵入者に使うような気がする。それか、鋭い刃物か。銃ではなくて。」

「賛成よ。」グエンはしばし考え込んだ。「その私立探偵のこと、もっと調査したほうがよさそう。彼が死んだとき、彫刻以外のものを追っていた可能性はあるのかな。目的のものを見つけ出し、雇い主に殺されたという可能性もある。」

「何が起こったにせよ、」トシコはいった。「もし、わたしが可能性の無作為応用理論より実際に幸運を信じるたちだとしたら、間違いなくあの彫刻は近寄った人間に不幸をもたらしているといえる。」

オーエンがハブに戻ってくると、ジャックとイアントがふたりしてコンピュータの画面の上に覆いかぶさるように背をまるめていた。オーエンは疲れており、ほこりだらけで、古い記録の走り書きを読み取ろうとしたため目はパリパリになっていた。

「調べたところでは、」彼は誰ともなく話し始めた。「他にもあるべき場所にブツがないもの5点。記録がないのに存在するもの3点。とんとんとところだ。」

ジャックもイアントも反応しなかった。

「グエン、」ジャックはいった。「私立探偵の銀行取引状況を確認した。最後に大金を振り込んできたのは、ディミトリ・アルカノヴィッチ。ロシアの大金持ち・・・カーディフの中心にあるアルカノヴィッチ・ホテルのオーナーだ。」

オーエンは周りを見回したが、グエンの姿はなかった。トシコの姿もなかった。

「警察にいたとき、彼の名を耳にしたことがある。」グエンの声が金属っぽく聞こえた。彼女がコム・リンクで話していることにオーエンは気づいた。「ロシア・マフィアと裏で繋がってる。」

「たぶん犯罪網を使ってカルト信者たちの彫刻を盗み出し、繋がる証拠を消すため私立探偵を始末したのだろう。」

「なら、乗り込んであげようじゃない。」グエンはいった。コム・リンクを通して、彼女の声がにやついているように聞こえた。

アルカノヴィッチ・ホテルは三角錐型で中抜きの中庭があり、囲むように作られた客室にはバルコニーがついており、そこは緑で覆われた屋根と上のペントハウスから見下ろせるようになっていて、客室からは泉のある彫刻エリアの小さなバーとレストランの席が見えるようになっていた。

中庭の真ん中で、グエンとトシコは彫刻を見つけた。

素晴らしかった。美しい。驚くほどだった。グエンは息を飲み、思わず見上げたまま止まってしまった。

彫刻は特に複雑というほどではなく、美術的に優れているというわけでもない。追ってきた彫刻の特徴通りで、それは白く内側から輝いて見えるただの大きな球体で、円錐状の黒い石の上に置かれていた。最初のうちは見ても退屈なだけだった。しかし、さらに球体に近づいてのぞきこんでみると・・・何かが見えた。その中にとらえがたい色合いがさざ波のようにうねり、永遠に捕らえられた囚われの北極光のようだった。冷たい光のかすかに点滅する炎のような輝きは、何か意味や目的があるように見えた。

グエンが子供のころ、両親の家の暖炉の前で燃え盛る石炭を眺め、何時間も過ごした。炎はいつだって彼女にとって魔法のような存在で、球体の中心を、囚われた輝く美しさを眺めていると、昔そうであった、もう二度と戻れない子供時代の体験と繋がっていくように感じた。

「これ、彫刻ではない。」トシコはいった。

グエンは周りを見渡した。トシコはひざまずき、黒い円錐形に手をつけて調べていた。

「どういうこと、彫刻ではないって？」

「いいたいのは・・・」トシコは黒い表面を電子解錠装置でスキャンしていた。三角形の表示が現れた。グエンがのぞいてみると、空洞の内部に、ワイヤー、回路、金属シリンダーが見えた。どう見てもエイリアン、しかも技術の固まりだった。

「単純に光らせるための装置では？」グエンはたずねた。

「違う。」ジャックが彼女の後ろからいった。「吹き飛ばすための装置だ。」

グエンは振り返った。ジャック、オーエンにイアントがちょうど吹き抜けに入ってきたところだった。

「吹き飛ばす？いったい何のこと？」

トシコはしゃがんだ位置からグエンを見上げた。「回路の配置を正しく理解できているとすると、これは反物質爆弾で、時間フィールドと磁気フィールドの複雑な組み合わせで、千兆分の一秒で爆発する代物。文字通り時間的に静止してるけど。」

「信管を抜けないの？」グエンは声が高くなり、いやな声と思いながらたずねた。

「もう手遅れ。」トシコは変わらない声でいった。

「爆発した後・・・エネルギー源が爆発の広がりを抑えているだけ！」

彼女の後ろから、イアントの声がグエンに届いた。「いったいどの馬鹿が核爆弾を美術

品として展示しようとするのでしょうか？」

「敵の本拠地に武器をこっそり持ち込みたいと考える輩だ。」ジャックがうなった。「美術品を飾る誘惑に勝てると思うか？特に征服した惑星の人物から贈られたときは。これはトロイの木馬だ。ブービートラップともいう。信管を抜くことは不可能で、たぶん作った者がやりたいときにリモート・コントロールで開放できるようになっているのだろう。」

「で、おれたちがブービーってわけか。」オーエンがつぶやいた。

「単に事故で流れ着いただけだと思う。」ジャックはいった。「おれたちをハメるためではない。」

「そんなの爆発したら慰めにもならない。」グエンは指摘した。

トシコはくまなく台座の周囲を検査した。ジャックが歯の間から息をシューっと吐き出す音が、グエンに聞こえた。

「いい知らせと悪い知らせ、どちらがいい？」恐ろしく長い間があった後、トシコはいった。

「どうせ、悪い知らせって、『ドカン』だろ？」オーエンがたずねた。

トシは彼を無視した。「いい知らせは、エネルギー源があと数千年は持続できるってこと。読み取った情報が正しければね。悪い知らせは、配線が一部緩んでること。これが何十年にも渡る放射能漏れの原因。これはわたしでも直せる。ドライバーだけでね。五分間息を止める能力があればの話だけど。」

「修理が終わったら、」ジャックは厳しくいった。「おれたち五人でこいつを盗み出し、裂け目に送り出して、この惑星から追い出す。」

ホテルの吹き抜けを、バーを、レストランのオープンカフェを、ここを見下ろすバルコニーを、そしてロシアの犯罪組織のボス、ディミトリ・アルカノヴィッチが住んでいるという最上階のペントハウスをグエンは見渡した。「で、いったいどうやって、気づかれずにやってのけるの？」彼女はたずねた。

「さあな。」ジャックは返答した。「でも、これは芸術作品になるだろうな。」

Notice 2009/05/31

このドキュメントは、Kubo Sachie が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あったら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAGINE YEARBOOK

Published by Titan Books

First edition August 2008

'The Beauty of Our Weapons' by Andy Lane

ISBN-13: 978-1845769369